

2025年2月23日顕現後第7主日

創世記 45章3-11、15節

コリントの信徒への手紙一 15章35-38、42-50節

ルカによる福音書 6章27-38節

先週から庭の梅が満開です。また、先週のある朝、狸が庭に来ていました。下北沢に生息する有名な狸のようです。

さて、本日の旧約日課は、創世記の中のヨセフに関するお話の一部です。創世記は、37章から物語の中心人物はヨセフになります。また創世記の最後は、ヨセフの死で終わります。その部分は本日の日課ではありませんが、新しい聖書協会共同訳では「ヨセフは百十歳で亡くなった。人々はエジプトで彼をミイラにし、棺に納めた」となっています。ヨセフはミイラになったようです。

さて、ヨセフは、『聖書』全体の中でも誠実な人として有名です。本日の箇所でも妬みから自分をエジプトへ売った兄弟との再会を喜んでいます。なぜならば、自分に起きた出来事背景に、主なる神様の意図があることを知っていたからです。ヨセフの誠実さは、主なる神様への信頼や忠誠心によるものなのです。

本日の福音書は、イエス様が「幸いと災い」に続き、教えがまとめられている箇所です。『聖書』では、「敵を愛しなさい」と小見出しがついていますが、マタイ福音書における「山上の説教」の部分にあたります。ここでは一つひとつ細かくみませんが、マタイと比較した場合、イエス様の教え全体のとらえ方に違いがあります。マタイの場合は、イエス様の教えの実行の場を、教会内の人間関係を第一にしているのに対して、ルカの場合は、教会外の人間関係をも対象にしている可能性があるという点です。ルカの方が、イエス様の教えの実行対象を広げて描いているのです。教会においていつでも課題になる、内向き、外向きは、すでに福音書のイエス様の教えのとらえ方に存在していたのです。

これらの違いは、どちらが正しいかということではありません（どちらが好みかということはあるでしょう）。福音書を記した著者の意図、その著者の背景となる教会の社会状況の違いです。それでは、実際にイエス様が語られたときは、どのような意図で語られたかという疑問が出ます。ただ、それがわかれば苦労しないというところですが、あくまでわかる範囲で想像しますと、イエス様の活動は、実際の現象として、ユダヤ・イスラエルという人間関係をほとんど超えていません（復活のイエス様はそれを超えていたというのは別の話です）。パウロのように地中海世界を広く移動していませんので、教えの対象とその実行の場は、主なる神様に選ばれた民・ユダヤ・イスラエルにほぼ限定されていたといえます。しかし、そのユダヤ・イスラエルが厳しい教えを守ることを通して、外の世界に主なる神様を示す視野もあったことも確かでしょう。イエス様のもとに、民族や文化の違いを超えて、多様な人々が集まったというようなイメージがありますが、実際に集まった人々は、ユダヤ・イスラエルの人々が中心です。民族や文化を超えて人々が集まった（というかそのような人々の間に出向いて行った）のは、むしろパウロの方です。

パウロはそのような広い行動範囲を視野に持っていたからか、イエス様から直接教えを受けていなかったからか、福音書に書かれているようなイエス様の教えを、一つひとつ伝えて解説するようなことはなかったと思います。しかし、パウロは、もっと中心・根本的であり、大切な事柄を認識していました。それが復活です。

本日の福音書にあるイエス様の教えは、前提として復活が関わっています。イエス様が復活前提に教えたということではありません。それを受け継いでまとめたマタイそして本日のルカは、イエス様の復活を信じるものとしてこれらの教えを受け止めなさいと書いているということです。これらの厳しい教えは、新しい一般倫理の教えではなく、復活を信じる人は、この世界をすべてと思わないからこそ、これらの教えを大切な事柄としてとらえなさいということです。また、ヨセフのお話の最後には復活はありませんが、復活信仰があるからこそ、それによって歩む人は、ヨセフ以上に主なる神様を信頼して歩むことができるともいえるのです。

さて、本日の使徒書は、先週に引き続き、その復活についてパウロが語っている箇所です。特に、人はどのように復活するのかについて語っています。それは現代人と同じように、当時の人々も死んだ人間が復活するとは？と疑問に思ったからでしょう。パウロはそのような疑問を正面から受けとめつつも、少し論理的に強引さを感じるような返答をしています。

「死者はどのように復活するのか、どのような体で来るのか」(一コリ 15:35)はパウロが実際にコリントの教会で受けた質問といえるでしょう。パウロの答えは単純です。「死ななければ命を与えられることはありません」(一コリ 15:36)です。そして、それを種まきに譬えて単純なこととして語ります。種を蒔く時、蒔く種は麦であれ他の穀物であれ、種そのものであって、種が後に成長した植物を蒔くわけではない、同じように、死んだ体と復活する体は違うのだという説明です。

聖書日課では省略されていますが、パウロはこの死ぬ体と復活の体との違いを説明するために様々な生き物の肉の違い(39節)、天上と地上の体の違い(40節)、天体の動きの違い(41節)にまで触れて説明します。それらを受けて、「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに復活し」(1コリ 15:42)と説明を続けるのです。地上の肉を見ている限り、復活は理解できないということです。それゆえに、パウロはここでの結論として、「肉と血は神の国を受け継ぐことはできません。また、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐこともありません」(一コリ 15:50)とまとめます。

顕現後第5主日の使徒書から、第一コリントの復活についての箇所を読んできました。ここでのパウロの復活についての説明は、決して明快ではありません。どちらかというと「とにかく違う」ということだけを強調しているように思えます。そもそもパウロは、復活の具体的な仕組みを説明するつもりはなかったのでしょうか。なぜならば、復活は、自然界で繰り返される事柄ではなく、主なる神様を信じるか否かに、その上でさらに、イエス様の出来事がその主なる神様によるものであるかを、信じるか否かに関わっているからです。その信仰がない人にとって復活は理解不能であり、信じている人にとって具体的な説明は不要であるからです。

しかし、パウロは、復活について何も媒体なしで、信じなさいと求めているわけではなりません。教会という存在が、それを具体的に示す存在であると認識していたからです。パウロにとって、今もこれからもあり続ける復活の体のしるしは、教会に他ならないのです。わたしたちは、復活を信じているがゆえに、今も教会に集められています。そして、わたしたちはイエス様と同じようにはできなのですが、本日の箇所でイエス様が示してくださった教えを、わたしたちなりに実行することを求められています。わたしたちのできることを通して、イエス様の復活を示していきたいと思えます。そして、世界にはいつも希望があることを示していきたいと思えます。